二〇二一年版（二〇二〇年一月～二〇二一年三月）

すぎなみ詩歌館

角川庭園の俳句

はじめに

二〇二〇年一月から二〇二一年三月に『角川庭園・幻戯山房～すぎなみ詩歌館』で、句会を開いた十六グループと二つの俳句講座で詠まれた優秀句を発表していただきました。すでに本年五月末から六月にかけて、展示室に掲示させていただきましたが、句集の編集にあたり、指導の先生方に三句投句していただき、十七音の世界が一気に広がりました。

またグループごとに行ったコロナ感染症対策を手短にまとめました。

この句集は、角川庭園における俳句活動の年次報告書になったと思っています。これからも、俳句を詠み、読む場である角川庭園で、俳句に親しんでいただければと思います。

◇目次

（掲載はグループ発足順）

はごろもの会……4
花芭蕉俳句会……5
句歌詩帖草藏……6
幻戯会……7
すてちまお会……11
荻窪句会……13
青丹会……15
くるり……16
スナメリ句会……18
泉句会……19
俳句鴇の会……20
ちのね俳句会……21
苗句会……22
すなおな句会……23
まどの会……24
若之の会……25
●二〇二〇年度 すぎなみ詩歌館
俳句講座日曜コース……26
俳句講座土曜コース……27
●二〇二〇年を振り返って
コロナ禍に振りまわされた一年……28
二〇二〇年度 角川庭園詩歌館まつり……29

はごろもの会

発足年　二〇〇七年一月
開講日　第二月曜日午前
参加人数　十人

指導　川上呉郎

かわかみ・ごろう　昭和七（一九三二）年、広島県生れ。七十歳まで独学で俳句を楽しむ。昭和三十三～平成五年、裁判官、平成六～十四年、公証人。十五年「河」入会、二十一年同人、二十六年退会。句集『多摩野』。

手作りの重みがうれし柏餅　川上呉郎

耕すや夫婦話の届く距離

父の日や追想は父をやさしうす

「元気です」が聞こえるような賀状受く　八方淑夫

手摑みに水菜入れたりひとり鍋

ものの芽に音のあるらし夜明け前　中田靖子

桐の花長き脛持つ娘らがゆく

久方のスキップ路地の柿若葉　有馬宏子

息ひそめ人の遠さの身にしむる

数珠玉を残して角に売家建つ　鹿島真知子

雪雲の裂け目ひと筋浅間山

十薬を大きくまたぐ雨上がり　細木郁代

風熄みて終戦の日の灯透けゆく

衣更裏地の龍虎畳けり　北原孝子

細やかに猫の近況年賀状

春浅し生ゴミの日を鳴く烏　松本　恵

戸を操るや朝日に透ける初紅葉

雨あとの透ける嵯峨野や夏あざみ　佐川ゆうこ

知恩院声明澄みて夕紅葉

どの路地も光の中の柿若葉　俵木陶光

道を掃く音重なつて冬兆す

※発足時の指導者は市橋千翔さん。二〇一一年に川上呉郎さんに引き継がれた。

花芭蕉俳句会

発足年　二〇一〇年四月
開講日　第二木曜日午後
参加人数　八人

指導　俵木陶光

たわらぎ・とうこう　昭和七年（一九三二）生れ。かつて「馬酔木」に参加。角川詩歌館開館と同時に花芭蕉俳句会を立ち上げる。「言葉はやさしく、思いは深く」がモットー。また杉並区制八十周年を記念し区と協力し「すぎなみ詩歌館かるた」の作成者ともなっている。

夕焼けやバスの近付く深大寺　俵木陶光

キリンの子すつくと立ちて山笑ふ

十六夜の都電大きく曲がりゆく

初空や氏神の鳩旋回す　中﨑啓祐　二〇二〇年一月

両の手の持て余したりふところ手　中川路邦子

風光る関東平野一望す　中川路邦子　二〇二〇年二月

天守より見下ろす城下薄暑かな　中川路邦子　二〇二〇年五月

そしてまた真白き巨船夏の航　大本睡杏

絵はがきは上高地より夏来る　今井真知子　二〇二〇年六月

窓の前（さき）森さやさやと青葉風　小森谷栄子　二〇二〇年七月

遠雷やあの人は今どのあたり　中﨑啓祐

ずぶ濡れのシヤツの乗り込む夕立かな　大本惠子　二〇二〇年八月

爆音を吸い込む空や秋の声　山本一朗

秋暑し定刻過ぎし路線バス　中川路邦子　二〇二〇年九月

秋の雲シヤツター音の透き徹る　中﨑啓祐　二〇二〇年十月

信濃路の秋に淋しきナウマン象　大本睡杏

定刻を過ぎしバス停秋の風　小森谷栄子

背に紅葉竜王戦を待つ広間　今井真知子　二〇二〇年十一月

診察待つ妻も語らぬ神無月　中﨑啓祐

時雨るるや茶屋街店の赤き傘　今井真知子　二〇二〇年十二月

駅前のバス停に立つオリオンと　吉田圭人

冬空へメタセコイヤの鋸刀（のこぎりば）　大本睡杏　二〇二一年一月

街路樹の芽吹きを渡る歩道橋　大本睡杏　二〇二一年二月

シャボン玉彼方に蒼きガスタンク　大本睡杏

辛夷咲く青空さらに青み増す　中﨑啓祐　二〇二一年三月

句歌詩帖草藏

発足年　二〇一〇年四月
開講日　第一土曜日午後
参加人数　七人

指導　佐々木六戈

ささき・ろくか　昭和三十（一九五五）年、北海道生れ。俳人・歌人。作歌から始め、一九九二年、俳句結社「童子」に参加。二〇〇二年、句歌詩帖「草蔵」、十九年「艸」創刊。第四十六回角川短歌賞。著書に『佐々木六戈集』（セレクション俳人）、『佐々木六戈集』（セレクション歌人）、『佐々木六戈詩集成』。

数多咲く忘れ易さよ犬ふぐり　佐々木六戈

瀧裏を斯くやとしだれざくらかな

獅子身中紙香水を忍ばせて

バレンタインチョコなども出てわが詩嚢　葭澤美絵子

黒あげは翅ひらくとき波の音

番町に住みなす花見虱かな

一滴の香水をもて弔意とす

手をのべて冬遠からず火の暗さ

産声やその日津波の日と呼ばれ　嗚奈千

国を閉ぢ黒船祭り中止せり

十薬の閲ぎ合うたる塾居かな

甚平の赤子ばかりが這ひ来たり

行く年や八方塞がりとは知らず

矢大臣スノーブーツで現るる　荒井八雪

都市封鎖一尺ほどの蚯蚓出ず

雲梯を渡り切りたる七日盆

晩年のあやめのあとのあぢさゐよ

毒の草薬の草と枯れにけり

三寒四温眼鏡かければ智恵の湧く　石井　恵

空全部高らかにゆりの木の花

白絣父の教えも古りけり

冬至粥吹いて万端忘れけり

寒菊やひかえめと言う目だち方

かげろふの杖つく吾とすれ違ふ　かとうさき子

天窓に失す雨粒の夏の色

雀来てゐる風鈴なり出だす
水際に立つひたひたとひやひやと
寒風が叩きて誰の向う面
春の風手帳に棋譜を遺しけり　山田やよひ
てふてふの吸ひ上ぐ水の青さかな
音沙汰のなきまま蓮を香らせて
法名となりし色なき風の中
冬蝶の空の高さでありにけり
胎動を伝ふる声よ水温む　山内こころ
初蝶のけふより老いてゆきにけり
死ぬ暇も無し脱ぎてある蛇の衣
桔梗に一票投じたる蒼
雪ならむ霙ならむと階上がる

幻戯会

発足年　二〇一〇年七月
開講日　第二、四金曜日
参加人数　十九人

指導　鎌田　俊

かまだ・しゅん　昭和五十四（一九七九）年、山口県生れ。千葉県在住。「河」副主宰兼編集長。句集に『山羊の角』。

息切らし月まで行つて来しといふ　鎌田　俊
冷房のめつぽふ強し中華そば
うつし世のトマトの蔕を残しあふ
トンビ着てついとロック座出る紳士　林　璋
木屋町に紫煙くゆらすトンビの背　吉田武子
骨董市松にマントの吹かれをり　朝倉さき子
江戸川乱歩かばんに入れて黒マント　鋤柄光則

二〇二〇年一月

人日の丸々肥えて出勤す　尾沢久美子
片仮名に直線多き枯木立　鋤柄光則
むささびを瞬時月光とらへけり　藤武由美子
むささびや空翔ぶ記憶ある背骨　尾沢久美子
俎の海鼠に名前つけにけり　鋤柄光則
掃除機が留守に働く冬日和　高橋　實
むささびは座布団となり滑空す　笹本礼子
むささびもさるも生家の客とせり　野村宣子
大硝子曇りがちなり睦月尽　下平紀代子
ふきのたう言はねばならぬ事は言ふ　高橋　實

二〇二〇年二月

園児みな黄色い帽子蕗の薹　鋤柄光則
ふきのたうデル・デス・デム・デンもうけつかう　林　璋
亀鳴くやベテルギウスの赤の消ゆ　小川明宏
蛇穴を出でて確かめ合ふ記憶　鋤柄光則
チューリップゴブラン織の姫と騎士　鋤柄光則
月桂樹の覇者の冠風薫る　朝倉さき子

二〇二〇年五月

雁風呂に十字の焚木そつとくべ　小川明宏
薫風やかつて火星に湖ありき　鋤柄光則
かろがろと碧き地球の立夏かな　野村宣子
母生きた山河なりけり風薫る　高橋　實
彫刻の水浴びの女（ひと）新樹光　平田順子
篁の風のすがしき初がつを　吉田武子
仮縫の５㎜を正す羽抜鶏　北原孝子
向ひあふ薄暑の夕餉しづかなり　下平紀代子
パソコンの顔と乾杯する薄暑　鋤柄光則
婿となる客かも知れずビール買ふ　高橋　實
山彦は少年の声風五月　平田順子
蚕豆のさやに生まれる前の夢　吉井雅子
整備棟ＡＮＡの翼に西日差す　小川明宏
蜥蜴伏し喉へこへこと膨らませ　笹本礼子
アナログの歩幅の蝸牛急ぐ急ぐ　鋤柄光則
志功の女泰山木の花匂ふ　高橋　實

二〇二〇年六月

昼寝覚む名を呼んだとは知らなんだ　吉田武子

指先は日向のにほひ草矢打つ　穴井悦子

日食の欠けたる的に草矢射る　小川明宏

草矢とぶ川面を帰る夕渡し　石黒和紀

大宮の夏越の祓ひ矮鶏の鳴く　小川明宏

子の指の草矢の先の未来形　下平紀代子

殺されて幼の草矢ほめにけり　鋤柄光則

黒南風や醤の匂ふ港町　藤武由美子

毛虫焼く夕べ激しき雨となり　藤武由美子

白壁に縋る毛虫の昼下り　小池はる子

毛虫降る雨後の大地のぬめりたり　下平紀代子

木道を歩けば鳴るや水芭蕉　井出智恵子

毛虫焼く端（はな）からなかつたことにして　穴井悦子

マンデラの南阿の自由かたつむり　林　璋

鳳梨（あななす）やブルーラグーンの星数多（あまた）　尾沢久美子

パイナップル乱反射する海の道　平田順子

二〇二〇年七月

太陽を溜めて石垣パインかな　林　璋

水中花時差出勤に泡一つ　笹本礼子

歳の差を気にはしません叫ぶ蟇　北原孝子

痩身の雲水が行く蟬しぐれ　高橋　實

蟬の背に蟬の乗りたる真昼かな　鋤柄光則

蜩よ俺の気持に寄り添ふな　富田　宏

みぞおちに残る暑さのたまりけり　尾沢久美子

夏休み赤銅色の子供達　高橋　實

夏休み思惟のなかなる世界旅　石黒和紀

晩夏光銅鐸未だ眠りをり　朝倉さき子

お転婆の肢体自由や糸瓜さく　北原孝子

花へちま篠突く雨に一人酌む　吉田武子

白き蛾の帆を押し立てて蟻の葬列　林　璋

鰡跳ぶよ半端やないわこの暑さ　吉田武子

ドリブルをして足で割る栗の毬　林　璋

割算の端数の大きすぎる残暑　鋤柄光則

二〇二〇年八月

満月やマンモスゆらと凍土より　朝倉さき子
月に石投げておとなになる少年　鋤柄光則
雨を聴く白露の夜のミントティー　尾沢久美子
秋桜籠車に乗りて園児来る　小川明宏
鈴鳴らし月の砂漠を行く駱駝　林　璋
鈴虫や黒文字の添ふ茶請け菓子　小川明宏
夕星を手に秋の山駈け下りる　笹本礼子
百歳の寿命まつぴら瓢の笛　林　璋
鳩放ち少年の日と訣別す　朝倉さき子
優勝は赤のフリース着た案山子　吉井雅子
口角を酒で拭ひてとろろ汁　鋤柄光則
衣被たまるばかりの備忘録　下平紀代子
切り甘藷ぱつと消え去り猿の檻　高橋　實
マドンナも突つ掛けで来る焼芋屋　林　璋
千振を引くや忙しき島ぐらし　井出智恵子
然れども反芻続く夜長かな　穴井悦子

二〇二〇年九月

二〇二〇年十月

悠然と子らの掌（て）に来て赤とんぼ　小池はる子
公然と健忘症と言ひし秋　北原孝子
吹かれ癖ついて芒の風渡る　井出智恵子
禅僧も月も見に来る初尾花　小川明宏
穂すすきの誰か手招きしてをりぬ　林　璋
死に急ぐほどのことなしいぼむし　尾沢久美子
働かず生きるに慣れて衣被　林　璋
紅玉やいくらでも嘘つく女　吉井雅子
味噌汁は母雑炊は父の味　尾沢久美子
疫神（えきがみ）は近くに御在（おは）す神無月　吉井雅子
木守柿夜更けに星となりてをり　小川明宏
遊牧の民組む包（パオ）や寒北斗　林　璋
小鳥遊（たかなし）の表札仰ぐ小春の日　下平紀代子
遊動円木の幽かな揺れや暮早し　朝倉さき子
つぐ炭や十能片手の母偲ぶ　小池はる子
炭をつぐ無言に耳を傾けて　穴井悦子

二〇二〇年十一月

朴落葉くの字への字で沈んでく　富田　宏
愛でられし時期もありけり枯尾花　朝倉さき子
壁にある画鋲の跡の冬ざるる　尾沢久美子
北壁にザイル宙づり友凍てる　林　璋
岩礁の陽射し食み合ふ冬かもめ　尾沢久美子

二〇二〇年十二月

目の合ひてひと睨みする冬かもめ　下平紀代子
冬かもめ三条大橋百羽群れ　平田順子
冬天や麒麟の舌の黒き照り　下平紀代子

仲良しのひとり欠けたる日向ぼこ　小川明宏
義仲寺に眠る俳聖冬うらら　林　璋
クリスマス解凍中の七面鳥　穴井悦子
火星にも水在りクリスマスソング　下平紀代子
新しき入れ歯装着年の暮れ　穴井悦子
遠景となりゆく日々や年果つる　高橋　實
一陽来復湯船に手足伸ばしたり　小川明宏
唇の震へをなぞる冬の湖　下平紀代子

すてちまお会

発足年　二〇一〇年十月
開講日　第二日曜日午前
参加人数　十九人
指導　阪西敦子

さかにし・あつこ　昭和五十二（一九七七）年、神奈川県生れ。祖母の勧めで七歳より作句。「ホトトギス」同人、「円虹」所属。日本伝統俳句協会新人賞。『天の川銀河発電所』『俳コレ』入集。

昼飯の行きと帰りの残花かな　阪西敦子
泳ぎから戻るやパンにハム挟む
東京のどの渋滞も黄落す

凍鶴の野にうたふとき喉（のみど）立て　齊藤保志
橙を飾りて女系家族かな　齊藤保志
橙を重ぬる父の端座して　竹之内京子

二〇二〇年一月

鷹鳩と化して留守居の白ワイン　徳久あき　二〇二〇年二月

冴返るゴミ集積所移りけり　野上容子

春菊や香り畑に残しけり　野上容子

ポケットに小さき貝がら衣更　徳久あき　二〇二〇年五月

鍬当てし初筍や閑かなる　齊藤保志

竹の子のどおんと並ぶ市の朝　広田妙子

青あらし工事現場の早仕舞い　野上容子　二〇二〇年六月

鉄線花育む蔓の細きこと　加藤悦子

ぴょんと乗る蜘蛛にオセロは中断し　石黒嘉子

試食するメロンの列の最後尾　佐藤稲子　二〇二〇年七月

ハモニカの練習はじむ夏の夕　広田妙子

長廊下濡らしてゆけり跣足の子　広田妙子

踊りの輪一重になりぬ川の風　広田妙子　二〇二〇年八月

道の辺の赤まんまはからみあい　佐藤稲子

ほほずきをうまく鳴らせず別れ道　齊藤保志

蓑虫の強靭無比の糸紡ぐ　堀口泰司　二〇二〇年九月

山降りてバス停遠し葛の花　古矢敏光　二〇二〇年九月

握り飯山と積まれて鮭番屋　古矢敏光

遠近の眼鏡曇れる夜食かな　齊藤保志　二〇二〇年十月

揚げ麺の窪みに黄身や夜食喰ふ　齊藤保志

竹馬で見下ろす道や花薄　堀口泰司

ふつふつと豆を煮る音冬はじめ　広田妙子　二〇二〇年十一月

栗を見て栗を見て切る栗羊羹　石黒嘉子

初冬やガチャンとコップ床に散る　古矢敏光

暗転の舞台おくから咳こぼる　広田妙子　二〇二〇年十二月

切り干や日向ぼこしてさざめいて　石黒嘉子

飯場よりたなびく煙山眠る　藤沢俊彦

左義長や受験子の群疾く去りぬ　加藤悦子　二〇二一年一月

左義長や崩れてみれば友のゐて　竹之内京子

風にある水仙の香を辿りけり　三上典子

雪解けや街道旧家軒深く　加藤悦子　二〇二一年二月

春めくや江ノ電と海近くなり　野上容子

春めくや圧力鍋のピン上がる　野上容子

たんぽぽや三代続く歯科医院　野上容子　二〇二一年三月

蒲公英や巨きな牛の細き脛　加藤悦子

かぎろひの坂上り下り部活の子　竹之内京子

荻窪句会

発足年　二〇一二年六月
開講日　第一木曜日午後
参加人数　十五人

指導　日下野由季

ひがの・ゆき　昭和五十二（一九七七）年、東京都生れ。俳誌「海」編集長。第十七回山本健吉評論賞、第四十二回俳人協会新人賞。句集に『祈りの天』『馥郁』。俳人協会会員、日本文藝家協会会員。

初泣きの天の磐戸をひらきけり　日下野由季

字の大きい人より手紙水温む

吹かれつつ来て秋草のただなかに

咳くがをり咳くがをり四人部屋　牧三千夫

近く遠く響きあう声水温む　小林美智　二〇二〇年三月

折り紙のハートを添へてバレンタイン　白神真理

バンダナをリュックに結ぶ春の旅　大川千草

遠き日の麦わらストローしやぼん玉　本山公雄　二〇二〇年四月

しやぼん玉丸も歪も輝きて　木山正義

幾筋に川面を分かつ花筏　白井晴男

初幟嬰の手足の良く動く　白神真理　二〇二〇年五月

鯉のぼり大口あけて多摩を飲む　木山正義

屋久杉のほのかに香る祝箸　木山正義　二〇二〇年一月

太き字で孫の名しるす祝箸　國松ひさ子

四日まだ押されて進む初詣　池田絵里子

武蔵野の大地持ち上げ蕗の薹　大川千草　二〇二〇年二月

初釜や静寂の中のふくさの音　野口芳枝

手伝は不器用でもいい粽結ふ　水川怜子

大胆な赤生き生きとアマリリス　本山公雄　二〇二〇年六月

置き配の段ボール箱西日さす　清水せつこ

豆飯の香り飛び出す炊飯器　本山公雄

朴咲くや閉鎖の続く登山道　白神真理　二〇二〇年七月

ぬれた幹しずかに蟬になる途中　清水せつこ

突きたての角の立ちたる心太　大川千草

片脚は千枚の田に虹立てり　大川千草　二〇二〇年八月

日の射して大海原に虹の橋　白神真理

折り鶴を折つても折つても原爆忌　水川怜子

したたれる水蜜桃をすすりけり　大川千草　二〇二〇年九月

丹沢をかなめに据えていわし雲　清水せつこ

遠富士の空に一刷毛涼新た　増田公治

立ち止ることの多くて金木犀　清水せつこ　二〇二〇年十月

二十年経し満開の金木犀　早瀬　梢

小さき手をひらいてみせて木の実独楽　白神真理

冬初め茶柱たたぬテイーバッグ　小林美智　二〇二〇年十一月

取り寄せの会席御膳小六月　本山公雄

帰り花残る日差しを惜しみけり　大川千草

磨かれし玻璃戸明るき師走空　白神真理　二〇二〇年十二月

猫に会えば猫と遊んで町師走　小林美智

名画座の角よりつづく冬木立　大川千草

ラディッシュの紅を加へて七草粥　小林美智　二〇二一年一月

集ふ事かなはぬ今よ福寿草　清水せつこ

淑気満つ翁の句碑に触れてより　大川千草

衣更着と声に出しつつ羽織りけり　小林美智　二〇二一年二月

うしろより初雪降れる街の空　野口芳枝

迎え来し介護の車春の色　國松ひさ子

春の風太極拳の指先に　大川千草　二〇二一年三月

鯉浮いて頭の上を春の風　木山正義

アマリリスけふ一日の水をたす　野口芳枝

青丹会

発足年　二〇一二年十月
開講日　第一、三日曜日午前　指導　林　誠司
参加人数　十八人

はやし・せいじ　昭和四十（一九六五）年、東京都生れ。句集『ブリッジ』『退屈王』。第二十五回俳人協会新人賞。俳句総合誌「俳句四季」「俳句界」編集長を務め、現在、「俳句アトラス」代表。俳句愛好誌「海光」代表。

海風のいま爽籟に変はりけり　林　誠司

海に座すひとりひとりの白秋忌

盗人の墓をたたへる花ふぶき

世が変わるつぶやき合うは吾亦紅　山田和子

海光る味わいつくす金目鯛

まんさくや綴織（つづれお）りつつ魁（さきがけ）ぬ　田中久仁子

コスモスの鉢殿に乗せ転居かな

リハビリに通ひし道や春の泥　矢島久美

離れつつラジオ体操たんぽぽ黄

銀漢や沖ほど昏き土佐の海　篠原賢二

東から伸びる吊り尾根大満月

蔓引けば日差しの中に零余子かな　小久江冴秀

月冴ゆる万物の長孤独なり

遺句集を終はりから読む冬夕焼　関口下枝

スーパームーン大蛤は舌出しぬ

名月を飲みこまんとす秘湯かな　冨永志保子

春泥や少女十五のわだかまり

若駒よ壱岐の潮風腹で聞け　榎本治美

大潮に引かれ現る天の川

まず草を引くふるさとの墓参かな　吉岡七五三

ふぐ食いに軋む階段上りけり

小高きは某跡や夏来る　本間ひらぎ

浮橋の波紋をさまる夏燕

春塵やタイムタイムの草野球　平山　寛

風花の寝覚の床へ二三片

灯も星も手にひんやりと聖夜かな　齊藤保志

棚の奥より伊那の味噌だれ秋渇き

風をぬぎ空をぬぎたる子馬かな　木村　凡

籐枕見た夢全てとおりぬけ

デイケアへ初の相乗り舞ふ枯葉　村田みね子

聴診器手首にシップ年の暮

夕映に喉細める羽抜鶏　里見　游

満月をそのまま使ふ野外劇

干し竿の春塵まづは拭きにけり　田川嘉子

夕虹の街全体に立ちにけり

あみ笠の残されたまま蟬しぐれ　水川怜子

コスモスや診察室の一輪ざし

水芭蕉会津へ続く霧の道　中尾和香子

木道きしむ歩荷の歩み水芭蕉

くるり

発足年　二〇一三年四月
開講日　第三木曜日午前
参加人数　八人

指導　野口る理

のぐち・るり　昭和六十一（一九八六）年、鳥取県生れ、徳島県育ち。瀬戸内寂聴の文学塾に参加。高校時代に俳句をはじめる。平成二十三年、神野紗希、江渡華子と俳句ウェブマガジン「スピカ」創刊。同年、『俳コレ』『天の川銀河発電所』入集。句集『しやりり』。

水無月の紙を透かせるカレーパン　野口る理

夏の蝶ならば瞬き縫へ進め

もうなにもしばらぬ虹となりにけり

初日記閉じて思ひのまま生きん　石田　磬　二〇二〇年一月

茶柱をそっと飲み込み去年今年　柴田ふらり

父の箸先ず春菊の芥子和え　若林冴え虎　二〇二〇年二月

草もちのしみじみ緑丸くなれ　木田捨て助

蝶番ぎゅるんと鳴いて月おぼろ　原田美穂　二〇二〇年五月

さあ上を向いて歩こう花水木　柴田ふらり

驟雨くる仲直りする理由とす　吉田ヨシ子　二〇二〇年六月

夫見舞う夏至の短き影連れて　石田　磬

白壁を突き抜けるごと蟬の鳴く　石田　磬　二〇二〇年七月

虎が雨黒衣の女ペダル踏む　原田美穂

一グラムも増やすな八月の重さ　柴田ふらり　二〇二〇年八月

揚花火クリムトの女薄目開け　吉田ヨシ子

割り切れぬものを束ねて野分さる　原田美穂　二〇二〇年九月

だしぬけに9月が憂い連れてくる　石田　磬

多弁という虚ろを見せて秋の森　吉田ヨシ子　二〇二〇年十月

朽ちた舟中に萎びた芒生え　若林冴え虎

薄き陽の集まる処石蕗の花　原田美穂　二〇二〇年十一月

灯台の朽ちた石段覆う石蕗（つわ）　若林冴え虎

終わりしものまた語りだす落ち葉たき　吉田ヨシ子　二〇二〇年十二月

湯に浮かぶ柚に爪たてこの平和　吉田ヨシ子

新年や髪逆立てて探し物　原田美穂　二〇二一年一月

土と陽と水の匂ひや七日粥　原田美穂

春めくやけんかの種も植え替えて　加藤エコ　二〇二一年二月

ふらここの向こうの海ののほほんと　柴田ふらり

落椿息づいている藪の中　原田美穂　二〇二一年三月

我を呼ぶ声は透明目借時　原田美穂

スナメリ句会

発足年　二〇一三年十月
開講日　第一木曜日午前
参加人数　十四人

指導　髙柳克弘

たかやなぎ・かつひろ　昭和五十五（一九八〇）年、静岡県生れ。「鷹」編集長。第一九回俳句研究賞、第一回田中裕明賞、第二十二回俳人協会評論新人賞。句集『未踏』『寒林』。評論集『凛然たる青春』『どれがほんと？万太郎俳句の虚と実』『究極の俳句』など。

ぬぐふものなくて拳や米こぼす　髙柳克弘

バルコンや闇を恐れて殖えゆく灯

部屋にゐて世界見通す寒さかな

初旅や地球のほこりふうと吹く　伊狩七重　二〇二〇年一月

寒凪や砂丘行く影麒麟めく　山本和子　二〇二〇年二月

ガラス拭く春が一杯来るように　竹内静江　二〇二〇年三月

山雀や牡丹の新芽な喰ひそ　伊狩七重　二〇二〇年四月

虹立ちてわが少食を咎めけり　福田健太　二〇二〇年五月

キャンバスの錆びし釘抜く梅雨の午後　山口美智子　二〇二〇年六月

雲の峰縄文土器の家族愛　近田吉幸　二〇二〇年七月

糸杉に蛇を絡ませたのは誰　鈴木洋子　二〇二〇年八月

稲の香に道は一本日暮なり　木田和子　二〇二〇年九月

しその実入りのいなりずしおとなりへ　二見明子　二〇二〇年十月

押し合うや草食む鹿の白き尻　関根陽子　二〇二〇年十一月

クリスマス除菌剤置きサンタ待つ　朝妻裕子　二〇二〇年十二月

ふるさとより梅だよりあり切符買ふ　持田育司　二〇二一年一月

日だまりに梢ゆらすや雀の子　としこ　二〇二一年二月

雛祭り五才に贈る花選び　藤本信子　二〇二一年三月

泉句会

発足年　二〇一四年四月
開講日　第二火曜日午後
参加人数　八人

指導　今泉康弘

いまいずみ・やすひろ　昭和四十二（一九六七）年、群馬県生れ。高校時代から句作。「円錐」同人。第二回俳句空間新人賞、第十二回山本健吉評論賞。評論集『人それを俳句と呼ぶ』、評伝『渡邊白泉の句と真実』。

イカロスの見しもの告げよあげひばり　今泉康弘

渡るべき河あり風の中にあり

七月やビニール傘でゆくあの世

「重いですよ」餅の包みと抱き合ふ　矢野美智子　二〇二〇年一月

救急車の音やむ闇の余寒かな　松井宏文　二〇二〇年二月

とげぬき地蔵の香煙しみる冬帽子　松井宏文　二〇二〇年四月

目に沁みる　何が　煙が　惜春譜　藤本ミツ子

天と地を結ぶ雅びや藤の垂れ　早出和子　二〇二〇年五月

蛇を指差しへびなんていないよね　矢野美智子　二〇二〇年六月

棘紅しむらむすめといふ父の薔薇　伊狩七重

ひつぱつてひつぱりあつて蜘蛛の糸　三由雅子

茄子胡瓜花つきしまま路地の市　伊狩七重　二〇二〇年七月

過ちのやうに一すぢかなかなが　矢野美智子　二〇二〇年八月

さるすべりの花に休みてお坊さん　矢野美智子

夏大根苦み辛みをすりおろす　三由雅子

銀湾や空の円さをしたがえる　伊狩七重　二〇二〇年九月

遊ばむと声のありけり芒原　矢野美智子

落つるもの覗きゐるごと髪洗ふ　松井宏文

会いたくてじっと見上げる天の川　今冨由起子

風に乗り風を乗りかへ赤蜻蛉　松井宏文　二〇二〇年十月

秋鯖のまつたりからむ味噌煮かな　三由雅子　二〇二〇年十一月

紅い実に活けて華やぐ枯れ薄　今冨由起子

古着屋の並ぶ小道の小春かな　松井宏文　二〇二〇年十二月

牛の眼のごろりと動き冬ごもり　矢野美智子　二〇二一年一月

北国の子牛の毛布かけられて　松井宏文

あたたかや知らない町の鐘の鳴る　矢野美智子　二〇二一年二月

マラソンのゴールテープに春の風　三由雅子　二〇二一年三月

俳句鴇の会

発足年　二〇一四年十月
開講日　第一火曜日午前
参加人数　九人

指導　鴇田智哉

ときた・ともや　昭和四十四（一九六九）年、千葉県生れ。平成八年「魚座」入会。終刊後十九年「雲」入会、退会後二十七年同人誌「オルガン」参加。句集に『こゑふたつ』『凧と円柱』『エレメンツ』。第十六回俳句研究賞、第二十九回俳人協会新人賞、第六回田中裕明賞。

双六のたうたう海へ行きつけり　鴇田智哉

雷のなほぺしやんこにひしやげたる

三人の子と団栗のドラマなり

からす天狗のマスクしてボール蹴る　田本道江　二〇二〇年一月

暗記するほど双六の擦れたる　露無成子

一枚の葉を閉ぢ込めて結氷す　松浦恵美子　二〇二〇年二月

芽の吹きてとたんにトランペットぷう　矢野美智子

美術館から悴みてトンカツ屋　田本道江

春風の中には揺れてゐるものも　矢野美智子

噴水の向かうの椅子に眠る人　松浦恵美子　二〇二〇年七月

枝豆の今日はいいねと塩かげん　三由雅子　二〇二〇年八月

会釈して隣の墓に参る人　三由雅子　二〇二〇年九月

全身を細くして入るすすき原　和智安江　二〇二〇年十月

顔のある団栗ひとつポケットに　田本道江　二〇二〇年十一月

土色のおでんぶるぶるしてをりぬ　矢野美智子　二〇二〇年十二月

がつがつと独楽のぶつかり始めたる　松井宏文　二〇二一年一月

ヒーターの燃え盛る音ミリミリと　仁科祥子

人参を月のうさぎにあげたき夜　松浦恵美子

川底をまっ逆さまにつつく鴨　仁科祥子　二〇二一年二月

絨毯の花に隠れてゐるピアス　松浦恵美子

鷺へ潮の流れが変わりをり　田本道江

ちのね俳句会

発足年　二〇一六年四月
開講日　第四火曜日午後
参加人数　十五人

指導　茅根知子

ちのね・ともこ　平成十（一九九八）年「魚座」入会、俳句を始める。二〇〇一年　第十五回俳壇賞。「絵空」同人、俳人協会会員。句集『眠るまで』『赤い金魚』。

いつか死ぬ人を愛する涼しさよ　茅根知子

地下道にゐる人間ときりぎりす

青い絵を行列のゆく寒さかな

水中花水飲み鳥を誘ひたる　山村笑流　二〇二〇年七月

生れし日のマジックアワー春の虹　二〇二一年二月

梅雨の月今日はじめての声を出す　高木らら　二〇二〇年七月

何事もふつうがよろし実千両　二〇二一年一月

校舎よりブラスバンドと秋の風　浅野純子　二〇二〇年九月

囀の木を突き止めて足止めて　二〇二一年二月

靖国の天衝く鳥居十二月　谷口律子　二〇二〇年十二月

初明りザック背負ひて君は発つ　柘植みつよ　二〇二一年一月

蘖はいのちのすみか雫受く　二〇二一年三月

約束の三越前は春めいて　山口汀子　二〇二〇年三月

膝の上の猫の重さよ火の恋し　二〇二〇年十一月

春うららとぷんと聞こゆ水の音　紺野果倫　二〇二一年二月

くり返す同じ会話や春の空　二〇二一年三月

冬野裂く直線の日が滑走路　田中有楽　二〇二〇年十一月

指輪抜き気ままな春がこそばゆい　二〇二一年二月

なにもないふだんの日々や夏深し　三木松庵　二〇二〇年七月

退屈もしあわせのうち秋の宵　二〇二〇年十月

黒富士を浮き上らせて冬茜　竹内ゆき　二〇二〇年十二月

春眠の夢きれぎれに続きけり　二〇二一年三月

苗句会

発足年　二〇一七年四月
開講日　第三火曜日午前
参加人数　十四人

指導　鶴岡加苗

つるおか・かなえ　昭和四十九（一九七四）年、広島県生れ。「香雨」同人、編集担当。俳人協会幹事。句集『青鳥』。第二回俳句四季新人賞、第三十八回俳人協会新人賞。

ゆく川の光をまとひ初燕　鶴岡加苗

母の日の間口を広げゐる花屋

秋風やメモの数字に覚えなく

夜勤明けの父も加はり年酒酌む　宇田川勝実　二〇二〇年一月

さくらんぼ明るき声の配達員　吉見布美子　二〇二〇年七月

盆踊り果てて暗渠の水の音　丸山ゆき子　二〇二〇年八月

茶の花や本を読む日の多くなり　丸山ゆき子　二〇二〇年十一月

戎笹抱きて路地を足早に　笹川玲子　二〇二〇年一月

すなおな句会

発足年　二〇一九年四月
開講日　第一金曜日
参加人数　十一人

指導　橋本　直

はしもと・すなお　昭和四十二（一九六七）年、愛媛県生れ。神奈川大学非常勤講師（俳句研究）。「豈」同人。現代俳句協会参与。合同句集『水の星』『鬼』、句集『符籙』。

みてをれば蚯蚓になにかみえてゐる　橋本　直

裸子の背にすんなりと手のとどく

たをやかな熊の糞なり秋に入る

喜寿迎え名乗りあげたい初句会　戸田年昭　二〇二〇年一月

雪時雨駐禁ステッカーてろり　赤坂奈緒　二〇二〇年二月

笑ひ声聞こえて笑ふヒヤシンス　春藤千恵　二〇二〇年四月

籠城や吹き抜けてゆく猫の恋　赤坂奈緒　二〇二〇年五月

みどり増す亦みどり増す無為のうち　戸田年昭　二〇二〇年六月

春なのに口紅売れぬまま夏へ　博多信子

終活や窓枠に咲く黴の花　戸田年昭　二〇二〇年七月

相席の蝶ネクタイと走り蕎麦　春藤千恵　二〇二〇年十一月

秋深し池塘を覆う雲の色　戸田年昭

妊娠をためらい続け十二月　博多信子　二〇二〇年十二月

駅伝のどんでん返し見る猪日　赤坂奈緒　二〇二一年一月

雪催バスはゆるりとカーブ切る　伊賀まゆみ　二〇二一年二月

下萌の緑に何か探す子ら　福永泰子

友が逝く白梅密に咲き誇る　戸田年昭

鈴転び巫女走りをり春の風　伊賀まゆみ　二〇二一年三月

春の日に母広縁に着物解く　福永泰子

皿洗ふ泡のふくらみ牡丹雪　戸田年昭

まどの会

発足年　二〇二〇年四月
開講日　第三土曜日午前
参加人数　九人

指導　田島健一

たじま・けんいち　昭和四十八（一九七三）年、東京都生れ。「炎環」同人。同人誌「豆の木」「オルガン」所属。句集『ただならぬぼ』。

感染のしずけさ遊具をのぼる蛇　田島健一

光る字を押すと湯の沸く雪夜かな

犀の子は龍の弾力にて長閑

鯛焼や同級生のまあるき眼　橋本めぐみ

遠足や甘さそれぞれ卵焼き

茶の花やらんおうさとうかたくりこ　大友まりえ

きじ白の迷い猫あり夕桜

吾子ふたりくっつく弾むちゃんちゃんこ　片岡真裕子

葉桜や煉瓦めくりて蟲愛でる

寒の入り麹に大豆買い揃え　大塚　勇

落葉焚串に焼きましゅまろ三つ

やはらかティッシュうんとやはらか卒業す　原麻理子

咲きさうな桜コロッケ食べながら

鴨の群れこころひとつにしてくの字　亀山和子

唐衣くれなゐきそふ緋木瓜かな

からももものそつくり風のそのさなか　福地　敦

蜘蛛の糸ひっかけてゆく暑さかな

滴りの苔を介してひとつなる　松井亜衣

白蝶は熱をおぼえてゐる記憶

柿なるや五右衛門風呂の底の板　生島　融

緊急事態道端のたんぽぽ黄

若之の会

発足年　二〇二〇年四月
開講日　第四月曜日午後
参加人数　十一人

指導　福田若之

ふくだ・わかゆき　平成三(一九九一)年、東京都生れ。「群青」「オルガン」に参加。句集『自生地』『二つ折りにされた二枚の紙と二つの留め金からなる一冊の蝶』。第六回与謝蕪村賞新人賞。

日と月のある世に鯵の骨を剝ぐ　福田若之

目も夜に慣れてさやかな風と知る

はまぐりを焼き遥かほど白い空

水藻食む逆立鳥や春の川　佐藤康子　二〇二〇年四月

地球儀がとろける夏の片頭痛　岩石むそむ　二〇二〇年五月

南風や身をよじらせて笑ふ木々　柴谷悦子　二〇二〇年六月

くちなわを花がいざなう蓮の池　岡部義信

家仕舞ひ家守の墓はそのままに　岩石むそむ　二〇二〇年七月

もろこしのひげに潜みし芋虫よ　藤掛紀子　二〇二〇年八月

紀の善のばばろあが呼ぶ秋の風　藤掛紀子　二〇二〇年九月

台風來寄席昼席に何故か居て　岩尾伎三江　二〇二〇年十月

街路樹に十一月の日ざしふる　柴谷悦子　二〇二〇年十一月

冬桜峠に山の神おはす　細谷道子　二〇二〇年十二月

一、三、五、一斉に零、寒雀　松浦榮子　二〇二一年一月

春の雪ひとしきり降りて雨となる　柴谷悦子　二〇二一年二月

春愁の似合わぬ人の長き文　岩尾伎三江　二〇二一年三月

俳句講座日曜コース

発足年　二〇二〇年七月
開講日　第三日曜日午後
参加人数　十二人

あぢさゐの色づきはじむ牛舎かな　宮本佳世乃
そこにゐた生きててのみこまれながら
君が灰ひとびとは若芝にゐる

寝ころべば風吹き抜けし暑さかな　大本恵子　二〇二〇年七月
七夕のハブラシ並ぶマグカップ　橋本めぐみ　二〇二〇年八月
カーテンもテレビもなくて今日の月　小澤俊彦　二〇二〇年九月
錦鯉はぜ紅葉へとすべりゆく　近藤俊子　二〇二〇年十月
柿ひとつ分ける姉妹の笑顔かな　西山八重子

指導　宮本佳世乃

みやもと・かよの　昭和四十九（一九七四）年、東京都生れ。「炎環」同人。同人誌「オルガン」「豆の木」所属。句集『鳥飛ぶ仕組み』『三〇一号室』。第三十五回現代俳句新人賞。

枯葉鳴る父の病を知りし時　大本恵子　二〇二〇年十一月
海光に溶け入る冬の鏡かな　近藤俊子　二〇二〇年十二月
瀧落ちるごとく暮れゆく今年かな　大矢聖子
この先の色を秘めたるヒヤシンス　藤川久美子　二〇二一年二月
寒晴や原宿駅舎解かれゆく　窪　龍子
春の日にしだれて咲きし梅うつくし　高城カツ子
ぽつねんとテニスボールや春の雨　田口直哉　二〇二一年三月
光の輪白い椿の独占す　岡　道子

※講座終了とともに、二〇二一年四月から、宮本佳世乃さんの指導による「佳日句会」が発足している。

俳句講座土曜コース

発足年　二〇二〇年七月
開講日　第二土曜日午前
参加人数　十人

蠟梅や逗子八景を雨の中　安里琉太

書初の八一ぶりなり昼を酌む

兄の捨てし付録の凧の四六判

柿若葉光の中のすべり台　杉本典子　二〇二〇年八月

稲妻の過ぎてまた生き物の声　岸上みち枝　二〇二〇年九月

鳩吹の少年風の中に入る　大熊光汰　二〇二〇年十月

柚子落ちて緑の皮の隠れけり　大熊光汰　二〇二〇年十一月

指導　安里琉太

あさと・りゅうた　平成六（一九九四）年、沖縄県生れ。「銀化」「群青」「澁」同人。句集『式日』。第四十四回俳人協会新人賞。

巣ごもりの部屋の輝き柚子ふたつ　岸上みち枝

マフラーを抱いて午睡の銀座線　杉本典子

枯蓮を静かな決断と思う　岸上みち枝　二〇二〇年十二月

竹音に怯む人の輪どんど焼き　松浦榮子　二〇二一年二月

原稿に逡巡のあとやぶ椿　吉岡裕子　二〇二一年三月

猫探す貼紙濡れて藪椿　渡邉文雄

雨粒をかきあつめてる春の草　杉本典子

※講座終了とともに、二〇二一年四月から柳元佑太さんを迎えて「荻窪令和会」が発足、指導を受けている。また、安里琉太さんは沖縄に帰郷したため、二〇二一年四月から講座のメンバーの多くは月一回、ネット句会を通して指導を受けている。

コロナ禍に振りまわされた一年

二〇二〇年度は、コロナ禍に振りまわされた一年でもありました。角川庭園の詩歌室は、緊急事態宣言のため二〇二〇年三月九日から五月三十一日まで使用できなくなりました。また参加者が多いグループでは、使用可能な時期であっても、「三密」を避けるため句会を取りやめたり、広い部屋のある施設に移って開催していました。新型コロナ感染症患者が増加している時期のコロナ対策を、それぞれのグループに聞きました。

はごろもの会

会の代表者が取りまとめる通信句会。

花芭蕉俳句会

メール、ファックス、郵便で俵木陶光さんに投句、清記用紙を返送してもらい選句。次に俵木さんが選句結果を集計し、講評をした。

句歌詩帖草蔵

通信句会で対応。ラインを用いて十二～十三人のリモート句会も開催した。

幻戯会

投句に往復はがきも用い、代表者がまとめる通信句会。リアル句会は、阿佐谷区民センターなど大きな会場で行った。

すてちまお会

ネット句会、夏雲システムは阪西敦子さんが設定。ＰＣが苦手な人は代表者が、代理入力。感染者が少ない時は高井戸の区民センターで句会を開催。

荻窪句会

会の代表者が取りまとめる通信句会。

青丹会

メールや手紙で林誠司さんに投句、清記用紙を返送してもらい選句。次に林さんが選句結果を集計し、講評をした。

くるり

会の代表者が取りまとめる通信句会。

スナメリ句会

会の代表者が取りまとめる通信句会。

泉句会

今泉康弘さんと会の代表者が取りまとめる通信句会。

鴇の会

郵便、メールで直接鴇田智哉さんに投句、個別指導を受けた。

ちのね俳句会

広い会場で、メンバーだけの自主句会を開催。係が茅根知子さんに全員の俳句をメールで投句。茅根さんがまとめて添削してコメントを付け、各メンバーにメールで返信してもらっている。

苗句会

会の代表者が取りまとめる通信句会。

すなおな句会

二〇二〇年十月からリアル句会を再開。投句選句までネットで行い、句会で橋本直さんに講評をしてもらっている。

まどの会

二〇二〇年三月からネット句会で対応している。

若之の会

夏雲システムで投句選句、福田若之さんによる選と講評は音源データでもらった。

二〇二〇年度 角川庭園詩歌館まつり

二〇二〇年十月二十五日の角川庭園詩歌館まつりでは、俳人石寒太さんに講演をお願いしました。石さんは、角川源義に大学の卒業論文の指導を受け、角川書店に就職をしたという経歴の持ち主で、恩師源義について語っていただくとともに、代表句についての解説をしていただきました。

新型コロナ感染症の患者さんが急増していることを鑑み、はじめて講演をYouTube（ユーチューブ）で配信することになりました。俳句においても、ネット句会、リモート句会がめずらしくなくなっていますが、多くの人にYouTubeを通して、詩歌館まつりを楽しんでいただきました。ちなみに、そのアクセス数は八〇〇を超えています。

2020年度角川庭園詩歌館まつり
YouTubeの配信画面（画面右が石寒太さん）

編集後記

二〇二〇年は、コロナ騒動に明け暮れた年でもありました。角川庭園は昼間しか開館しない施設ですので、詩歌室を閉鎖したのは、二カ月ほどでした。しかし密になることを避けて、ネット句会、通信句会に変更したり、より広い施設を利用するなどの工夫をされ、グループごとに俳句を楽しまれていました。

「一日で終わってしまう句会が、通信句会では、一カ月かけて楽しめる」と話してくださった人がいらっしゃいました。また沖縄からネットによって、俳句指導を受けるグループも誕生しました。コロナのおかげで、俳句の新しい可能性が見出されたのかもしれません。

長年、雑誌の編集に携わってきましたが、俳句を学び、楽しむ場としての角川庭園は、印刷物を超えた媒体であることを意識させられた編集作業でした。

（岩石隆光）

二〇二一年版（二〇二〇年一月～二〇二一年三月）
すぎなみ詩歌館 角川庭園の俳句

発行日　令和三年（二〇二一年）十月三十一日

発行・制作　特定非営利活動法人　すぎなみ学びの楽園
俳句事業部

住　所　東京都杉並区荻窪 3・14・22

電　話　03-6795-6855

レイアウト　山下青史
表紙カット　豊島孝彦